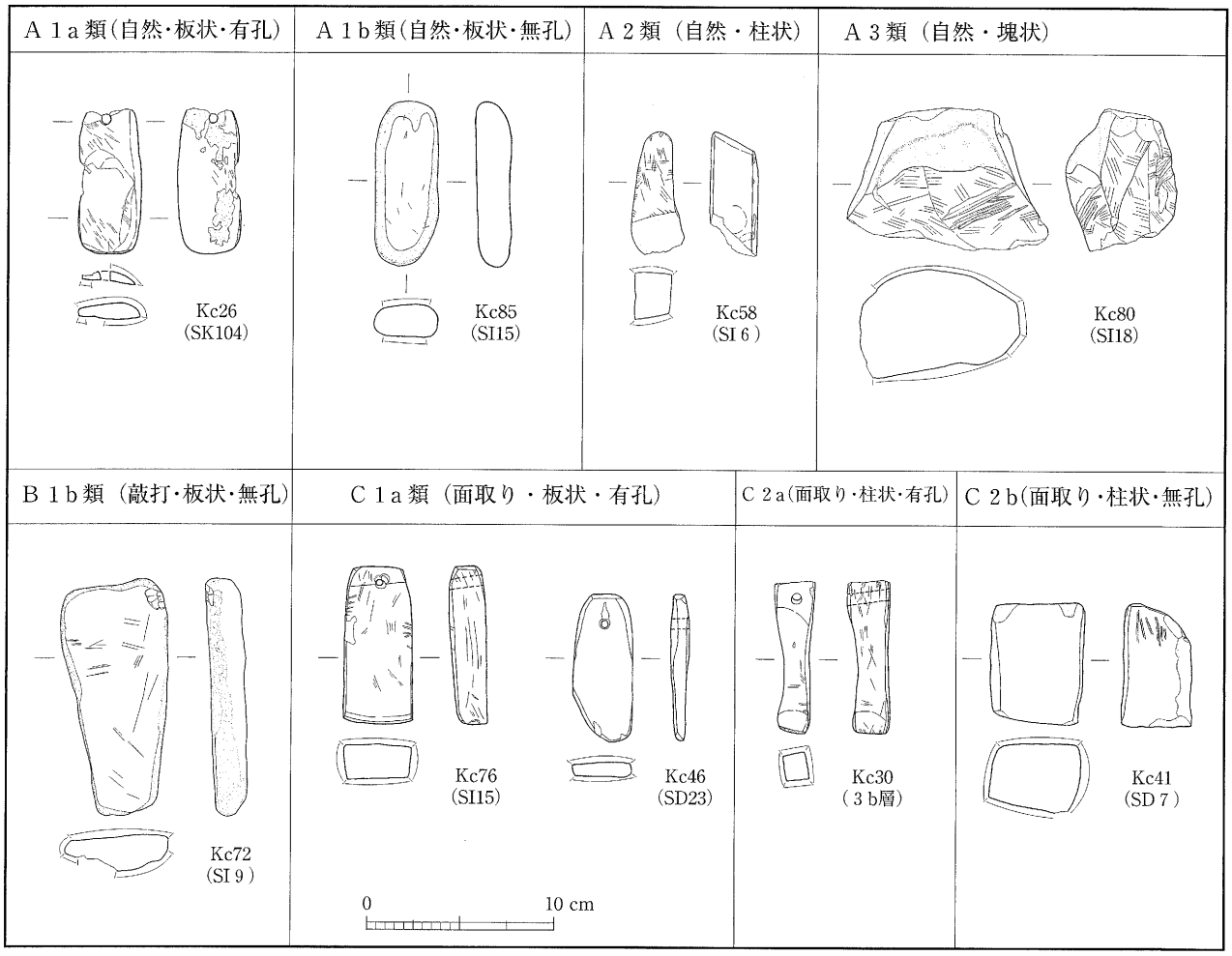


第266図　砥石分類図

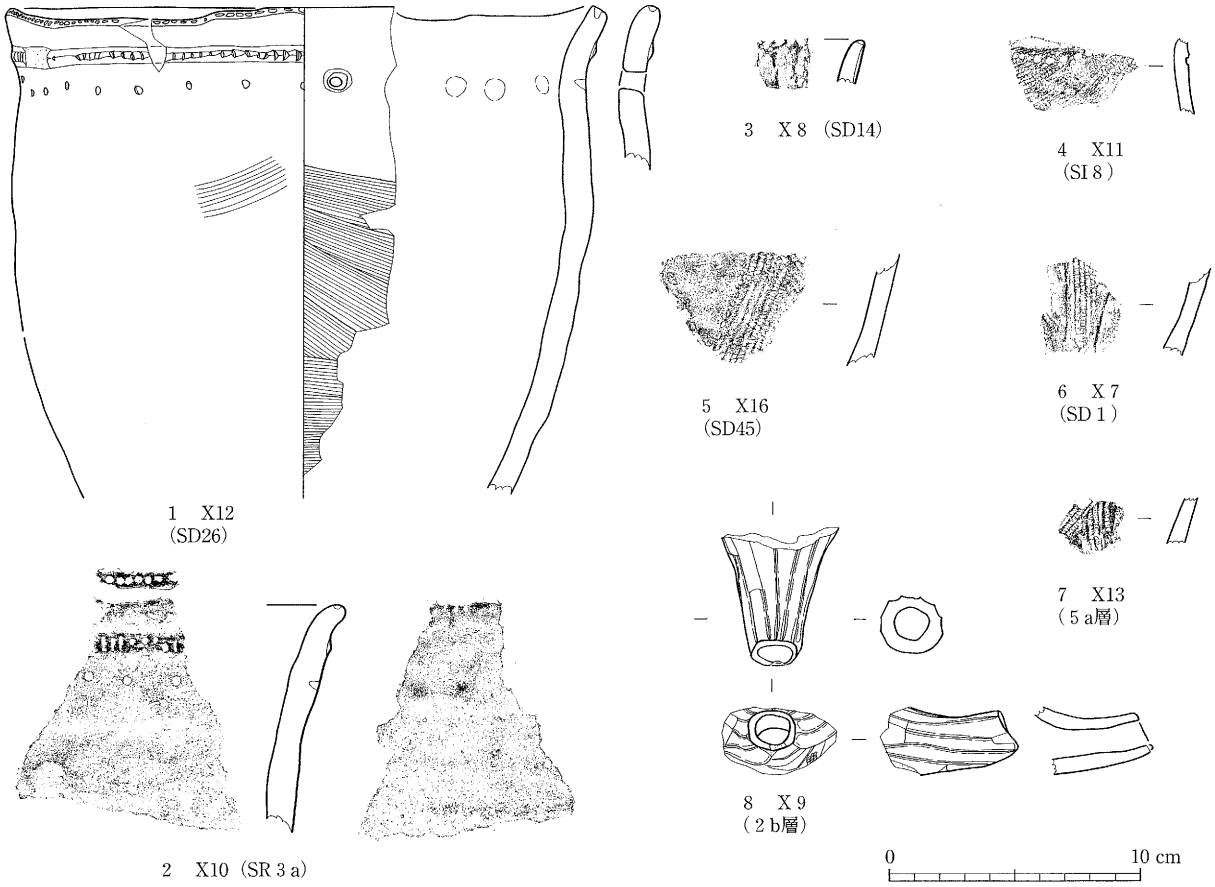
第７節　続縄文土器

１　出土土器の特徴

今回の調査では、続縄文土器及びその可能性のある土器は、８点出土した（第267図・図版96）。これらの土器には、古墳時代中期の遺構から出土したもの（Ｘ－11・12・16）とそれ以降の中世までの遺構から出土したもの（Ｘ－７・８・９・10・13）がある。各土器の特徴は次のとおりである。

Ｘ－12（第267図１）は、カマドをもつ古墳時代中期のＳＩ10竪穴住居跡に切られたＳＤ26溝跡から出土した。溝跡からは古墳時代中期の土師器が出土している。深鉢形の土器で、体部と口縁部の境が僅かに括れている。口唇部には直径約３mmの円形の刺突が連続して行なわれている。口唇から約1.5cm下には幅５mm程の隆帯を貼り付け、隆帯の頂部に連続する刻みを付けている。隆帯の１～1.5cm下の括れ部分には、直径３mm程の円形の刺突を1.3～2.8cm・平均２cmの間隔で行ない、刺突部分の内側は僅かに突出しており、いわゆる突瘤が形成されている。残存部の突瘤の一つは、焼成後に直径５mm程で穿孔されている。体部外面は無紋でヘラ状の工具による擦痕が認められる。内面は指またはヘラ状の工具によるナデ調整が行なわれている。全体的に器面に緩やかな凹凸がある。内外面の口縁部付近に部分的に炭化物が付着している。

Ｘ－10（第267図２）は、古墳時代後期の遺構であるＳＲ３ａ溝跡から出土した。深鉢形の土器と見られる。口



第267図　続縄文土器集成図

唇部に直径２～３ｍｍの連続刺突がある。口唇の約1.5cm下には連続した刻みのある隆帯が巡る。隆帯の1.5cm下の体部と口縁部の境には1.5～1.8cmの間隔で円形の刺突があり、刺突部分の内側は僅かに盛りあがっている。調整は内外面ともナデによる。基本的な意匠はＸ－12土器と同様であるが、口縁は端部が外反するだけで、口縁部と体部の境は括れていない。

Ｘ－８（第267図３）は、中世の遺構であるＳＤ14溝跡から出土した。鉢形土器の僅かに外反する口縁部の破片である。口唇部には連続して刻みが入れられている。口唇直下の外面には縦方向の微隆起線が２条残存している。右側の微隆起線の外側（右側）の谷部には３個の細長い刻列点文が残存している。

Ｘ－11（第267図４）は、鉢または甕の体部上端から口縁部にかけての破片である。体部と口縁部の境に低い隆帯が巡り、残存部の隆帯より下は全面に縄文が施されている。隆帯の下端部分には、直径約２mmの円形の刺突文が３mm前後の間隔で連続して巡っている。

Ｘ－16（第267図５）古墳時代中期のＳＤ45溝跡から出土した。鉢形土器の体部下半の破片である。細長い刻列点文によるＶ字状の区画があり、区画内は斜方向の帯縄文が埋めている。帯縄文と帯縄文の間の区画は無紋で、ヘラ状の工具により調整されている。内面はナデ調整されている。

Ｘ－７（第267図６）中世のＳＤ１溝跡から出土した。鉢形土器の体部下端付近の破片である。微隆起線によるＶ字状の区画を行ない区画内は帯縄文が埋めている。微隆起線と帯縄文による文様区画以外の部分は無文である。

Ｘ－13（第267図７）古墳時代中期の表土層などを母材とする畑の耕作土層と考えられる５ａ層から出土した。鉢形土器の体部下半の破片と考えられる。帯縄文により逆Ｖ字状の文様が付けられている。

Ｘ－９（第267図８）基本層２ｂ層から出土した。注口土器の注口部の破片である。注口部は体部から４cmほど

細長く張り出している。注口の周りには、口の先端から体部に向かって10条の微隆起線が放射状に広がる。注口からみて右側の下部には、放射状の微隆起線に斜交する微隆起線が３条配されている。斜交する微隆起線より体部側には帯縄文が認められる。

２　続縄文土器の型式的位置付け

宮城県内における続縄文土器の出土例は、佐藤信行氏による資料の収集・集成と研究により（佐藤信行：1984)、県北部（大崎平野以北）を主とし、これまでに後北C2－D式と北大Ⅰ式土器の出土が確認されている。最近の資料調査では、後北C2－D式と北大Ⅰ式土器の出土遺跡は合わせて22遺跡が確認されている(芳賀・阿部・古澤：2003)。宮城県南部では、続縄文土器の出土遺跡数は少なく、鴻ノ巣遺跡を含めて３遺跡があるだけである。黒川丘陵を越えて宮城県南部になると急激に遺跡数が減少することがわかる。鴻ノ巣遺跡以外の宮城県南部から出土した続縄文土器は、名取市清水遺跡から後北Ｃ2式の注口土器が１点、多賀城市山王遺跡から後北Ｃ2式とされる鉢形土器が１点あるに過ぎず、遺物数も少ない。なお、県北部の遺跡から出土した続縄文土器も、単独の出土資料や破片資料・表面採集資料が多く、各遺跡においては客体的存在であるため、宮城県内独自の編年はなく、続縄文土器の本願地である北海道における編年を援用し、その型式名称が用いられている。ただし編年の基準と位置付けについては、研究者により差異がある。そこで、大沼忠春氏と田才雅彦氏・小野裕子氏及び佐藤信行氏による３つの考え方を踏まえた上で、鴻ノ巣遺跡の続縄文土器の編年的位置付けを行なうこととする。

Ａ．大沼編年

後北Ｃ２式を４段階に分け、後北Ｃ２式から北大Ⅰ式への変遷は漸移的な変化と捉え、後北Ｃ２式から北大Ⅰ式への変遷とその特徴は次のように解説されている（大沼：1982・1989)。

〔後北Ｃ２式初期〕

・大部分の文様が隆起線で構成されている。

・隆起線の省略されたものをＤ式と呼ぶ場合もあるが、時期の異なるものではない。

・２本単位の隆起線による文様や、１本の隆起線による円文。

〔一般的な後北Ｃ２－Ｄ式〕

・独立した隆起線による文様の消滅。

・口縁部はしだいに外反するようになり、口唇上の刻み目が内側角と外側角につけられ、その内側の角が尖った口唇を形成し、外側の角が口唇直下の刻み目のある貼付帯となる。

・弧線文や円形文を縦横の区画に配置。

・地文としては、体下半の縦行、上半の横走する帯縄文の消滅。

・体下半の縄文も処々にたれ下がるものとなり、装飾的な文様も底部付近あるいは体下半には施されなくなる。

・器形には口径に較べて高さの低い深鉢や注口・片口・皿型などを呈する。

〔後北Ｃ２－Ｄ式後葉〕

・曲線的な文様構成が鋸歯状を呈するものへと変化する。

〔後北Ｃ２－Ｄ式末〕

・口唇が平になり、そこに小円形の刺突文を施すものが見られるようになる。

・口縁部に隆起線を２条めぐらし、その間に刺突をおこない、内面に突瘤を形成するものもある。

〔北大Ⅰ式〕

・口縁部に隆起線による文様帯が形成される。

・口唇に刻目を施すものが北大Ⅰ式の初期のものにも認められる。

・後葉のものでは口唇の断面に丸みをもつものがある。

・体部の縄文は帯状縄文あるいは右下りの斜行縄文で、隆起線に縁取りされるものや、刺突により縁取りされるものもある。縄文帯の代わりに条線を施すものもある。

・０段多条のＲＬの帯状に施される特殊な縄文の施されたものが多い。

Ｂ．田才・小野編年

田才雅彦は、円形突瘤文（初期には貫通孔、後期には刺突文）と、Ｖ字状のモチーフをもつ土器群をⅠ類からⅣ類に分類している（田才：1983）。

〔Ⅰ類〕

・後北Ｃ２・Ｄ式土器に突瘤文が加わったグループ

〔Ⅱ類〕

・何条もの横走もしくは縦走の微隆起線を廻らすグループ

・Ｖ字状モチーフについてみると、特殊縄文と微隆起線の組合せ・特殊縄文と沈線・斜行縄文と沈線・斜行縄文のみでそれぞれ作出する例がある。

〔Ⅲ類〕

・微隆起線を失い、斜行縄文と沈線が主な文様要素となるグループ

〔Ⅳ類〕

・縄文を失うと同時に胴部に文様が見られなくなるグループ

Ⅰ類については「突瘤文を受け入れたのは、後北Ｃ２・Ｄ式の時期であり、Ⅰ類は後北式土器の中にあって北大式誕生への胎動を示すものと言える。」として、特にこの段階の土器群について、突瘤文（貫通孔）の存在を加味して「モヨログループ」と呼び、Ⅰ類からⅡ類への移行をもって北大式土器の誕生としている。

さらに、小野裕子は、田才の考えに立って「『モヨログループ』から『北大Ⅰ式』への変化、殊に平行微隆起線文の採用に至る過程はまだ不明である。」としながらも、北大Ⅰ式の基準を平行微隆起線文の採用においている（小野：1998）。また、北大Ⅰ式の時期については、南小泉式と平行する時期、モヨログループについては南小泉式期が下限となると理解されている。

Ｃ．佐藤編年

宮城県内の続縄文土器を集成した佐藤信行は、後北Ｃ２式と北大Ⅰ式の特徴について、石附喜三男の説を踏襲するかたちで次のようにまとめている（佐藤信行：1984）。

〔後北Ｃ２式〕

・断面三角形状の“みみず張れ状”の微隆起線、束状ないし縞状縄文（帯縄文）、楔形状刻点列、刻み目のある隆起線文等によって構成される。

〔後北Ｄ式〕

・前者から微隆起線文を取り去った残余の要素によって構成される。すなわち、帯縄文が縦、横、弧状に器面を飾り、それに沿うように楔形刻点列文が付けられる

〔北大Ⅰ式〕

・最大の特徴は、口縁、稀に胴部に等間隔で施文される、突瘤文と呼ばれる手法である。

以上のように後北Ｃ２－Ｄ式と北大Ⅰ式と区分または各形式の細分を行ない、文様の構成要素が、①弧線文や円形文を縦横の区画に配置することによる文様の段階⇒②突瘤文の開始⇒③複数の微隆起線による文様の開始、の順

に移行していることの共通理解に立脚した上で、後北Ｃ２－Ｄ式と北大Ｉ式との区分だけについて見ると、

ａ．口縁部に隆起線による文様帯が形成された時点を北大Ｉ式の成立と見る。＝大沼編年

ｂ．後北Ｃ２・Ｄ式土器に突瘤文が加わった段階の土器をモヨログループとして後北Ｃ２－Ｄ式期から北大Ｉ式期への移行期を想定し、その上で微隆起線による文様の開始を北大Ｉ式の成立と見る。＝田才・小野編年

ｃ．口縁や胴部に等間隔で施文される突瘤文の開始を北大Ｉ式の成立と見る。：佐藤編年

というようにまとめられ、さらに北大Ｉ式の成立の基準だけを見ると、

ｉ案：微隆起線による文様の開始を北大Ｉ式の成立と見る。＝大沼編年、田才・小野編年

ii案：突瘤文の開始を北大Ｉ式の成立と見る。＝佐藤編年

という２つの考え方に整理される。微隆起線による模様を伴わず、突瘤文とそれ以外の施文で装飾される土器については、ｉ案とii案のどちらに準拠するかによって、ｉ案のように後北Ｃ２－Ｄ式の範疇で理解する立場と、ii案のように北大Ｉ式と理解する立場が生じている。

本文では、鴻ノ巣遺跡出土の続縄文土器（及びその可能性のある土器）について、続縄文土器の分布の中心地である北海道地域で考えられている編年の基準（主にｉ案の内の大沼編年）に準拠し、第267図の番号順に検討することとしたい。

Ｘ－12（第267図１）は、口縁と体部の境が括れその部分に等間隔で突瘤文が施文されるが、複数の微隆起線により構成される文様がなく、体部は無文である。模様構成からだけで判断すると後北Ｃ２－Ｄ式期の末頃のものと考えられる。

Ｘ－10（第267図２）は、Ｘ－12と同様の文様構成であることから、同じく後北Ｃ２－Ｄ式期の末頃のものと考えられる。Ｘ－10とＸ－12を比較すると、前者は体部から口縁部まで直線的にのびているのに対し、後者は口縁と体部の境に括れが生じているので、後者のＸ－12の方が若干後出的要素を含んでいる。

Ｘ－８（第267図３）は、小破片であるが口唇部の直下に２条の微隆起線による文様が確認されることから、北大Ｉ式と判断される。

Ｘ－11（第267図４）は、頚部付近に円形の刺突が連続しているが、刺突が接近していること、刺突が浅く内面に瘤が生じていないこと、などから、前記の判断基準としての突瘤文とは異なるものである。したがってこの文様だけでは型式決定できず、また続縄文土器であるかどうかの判断もできていない資料である。ただし、刺突に使用された工具の太さはＸ－10・12と類似し、他に弥生土器等も出土していないことから、続縄文土器の可能性のある土器として本項で取上げた。

Ｘ－16（第267図５）は、刻点列文によるＶ字状の区画を帯状縄文が埋めているものである。文様区画の刻点列文の形状が、後北Ｃ２－Ｄ式期のような楔状の三角形を呈するものではなく、北大Ｉ式の特徴を有するＸ－８土器の微隆起線の脇にこれと平行して付けられた細長い刻点列文と極めて良く似ていること、帯状縄文が刺突により縁取りされるものが北大Ｉ式にもあるとされることなどから、この土器については北大Ｉ式と考えられる。

Ｘ－７（第267図６）は、微隆起線によるＶ字状の区画を帯状縄文が埋めているものである。口縁部を欠くので明確な判断はできないが、微隆起線で区画された帯状縄文と帯状縄文の間の空間が、後北Ｃ２－Ｄ式期のような三角形の刺突による文様がないことと、北大Ｉ式期にも帯状縄文が隆起線に縁取りされるものがなお存在するとされていることから、北大Ｉ式期の資料と考えたい。

Ｘ－13（第267図７）は、区画文を持たず、帯状縄文だけでＶ字状の文様を構成する。微隆起線や刻点列文による区画帯を消失していることから、Ｘ－７土器よりも後出の土器と考えられる。ただし、本遺跡をはじめ宮城県内から北大Ⅱ式以降の続縄文土器は出土していないので、この土器についても、北大Ｉ式期のものと考えられる。

Ｘ－９（第267図８）は、複数の平行する微隆起線と帯状縄文によって模様が構成され、なおかつ後北Ｃ２－Ｄ式

期に比べて長い注口となっていることから、北大Ⅰ式土器と判断される。

以上のように今回の調査では、後北Ｃ２－Ｄ式期の範疇で考えられるもの２点、北大Ⅰ式及びその可能性のあるもの５点、続縄文土器と考えられるもの１点が出土した。出土資料全体を通して見ると、後北Ｃ２－Ｄ式期の可能性のあるものから北大Ⅰ式期へと続き、北大Ⅰ式期も、文様帯が微隆起線で区画されるもの、刻点列文によるもの、区画のないものなどの差異がある。その違いの成因に時間差が関っていたとすれば、鴻ノ巣遺跡に続縄文土器がもたらされたのは１回限りのものではなく、土器の出土量から考えて小人数ではあろうが長期間にわたって複数の交流があったものと推察される。

これらの続縄文土器の所属時期については、上層の遺構から出土したものを含めて、本調査区では、塩釜式期の遺構は検出されていないこと、塩釜式土器もほとんど出土していないこと、出土した続縄文土器では古い型式の後北Ｃ２－Ｄ式期と考えられるＸ－12土器が、ＳＤ26溝において南小泉式土師器と共に出土していることなどから、５ｂ層～７層で検出された遺構の時期である広義の南小泉式期と考えられる。なおＸ－12土器は、ＳＤ26溝において、カマドが敷設される以前のＳＩ６・８・18竪穴住居跡から出土する例の多い、口縁径と体部径・口縁部高と体部高の比率が等しい形態の小型壷（第121図３：Ｃ－494）と共伴していることから、鴻ノ巣遺跡の南小泉式期の集落では古い段階のものと考えられる。

なお、宮城県内でＸ－12土器に類似する資料は、伊治城跡のＳＤ260溝跡から塩釜式土器と共伴して出土している（佐藤則之：1992）。伊治城跡出土資料は、体部から口縁部にかけて直線的に開く鉢の破片で、２条の刻みのある隆帯の間に突瘤文が配され、体部には複数の沈線による八字状の文様が付けられているが、微隆起線文はない。報告書では北大式土器とし、北大式の開始年代が古墳時代前期までさかのぼることが明らかになったとしているが、小野裕子は「モヨログループ」と位置付けている（小野：1998）。県外の東北北部の類似資料としては、突瘤はないが口縁直下に刻みがある隆帯が巡り、体部が無文の土器が岩手県盛岡市月見山遺跡から、同じく突瘤はないが口唇部に刻みないし円形の刺突があり、口縁直下に刻みがある隆帯が２条巡り、体部が無文の土器が岩手県盛岡市芋田遺跡から出土しており、後北Ｃ２－Ｄ式とされている（津島他：1997）。

また、Ｘ－７土器の類例は、多賀城市山王遺跡出土のＳＸ058遺構（鴻ノ巣遺跡。期１段階相当）から南小泉式の一括土器とともに出土している。鉢形土器で、微隆起線による斜めの区画内を帯状縄文によって装飾しており、微隆起線で区画帯された帯状縄文と帯状縄文の間の空間は無文となっている。編年的位置付けは、大沼編年の後北Ｃ２－Ｄ式後葉または後北Ｃ２－Ｄ式末とされている（相沢：1999）。Ｘ－７土器は、後北Ｃ２－Ｄ式期に特徴的な三角形の連続する刺突を欠如しており、北大Ⅰ式期にも帯状縄文が隆起線に縁取りされるものが存在するとされていることから、北大Ⅰ式期に位置付けた。時期的には、中世の溝跡から出土したものであるが、本来は調査区内の古墳時代集落の形成期である中期に関係する土器と考えられる。山王遺跡ＳＸ05遺構出土の土器についても、文様構成と共伴する土師器の類似性から考えて、北大Ⅰ式土器としての位置付けることができないか再検討が必要と思われる。

本調査における、Ｘ－12土器＝後北Ｃ２－Ｄ式期（末頃）、Ｘ－７土器＝北大Ⅰ式という認識に従えば、伊治城跡ＳＤ260溝跡出土土器：北大Ⅰ式－塩釜式土器との共伴と、山王遺跡ＳＸ05遺構出土土器：後北Ｃ２－Ｄ式期－南小泉式土器との共伴という共伴型式の逆転という矛盾が解消され、伊治城跡ＳＤ260溝跡出土土器＝後北Ｃ２－Ｄ式期＝塩釜式土器共伴、山王遺跡ＳＸ05遺構出土土器＝北大Ⅰ式期＝南小泉式土器共伴という型式間の整合性をはかることができる。そのうえで、北大Ⅰ式の開始年代を古墳時代前期にさかのぼらせるのではなく、後北Ｃ２－Ｄ式期の最終末を、南小泉式前半段階頃（鴻ノ巣遺跡Ⅰ期１段階相当期）と理解するのが妥当と考えられる。